

☆☆ 連載短編実話 ☆☆

「帰って来た タンノイ」

工房 **NISSAN** 西 志郎

目次

| | |
|-------------------------|--------|
| 1. 「タンノイ」とは？ | 2 ページ |
| 2. 設計思想に見るお国柄 | 4 ページ |
| 3. 修理の手法に悩む | 5 ページ |
| 4. 休演代役の手配 | 6 ページ |
| 5. 一度で済ませるか、一つずつにするか | 7 ページ |
| 6. 灯台下暗しの修理拠点 | 8 ページ |
| 7. セーム革 vs. ポリウレタン | 9 ページ |
| 8. 組立て作業 | 10 ページ |
| 9. 宝の持ち腐れ、テレビの音 | 12 ページ |
| 10. 過酷なテスト課題、シューベルトの「鱒」 | 13 ページ |
| 11. 出張修理のボランティア | 14 ページ |
| 12. 箱が鳴ることの深意 | 15 ページ |
| あとがきに替えて「レコード 老前整理不要論」 | 16 ページ |

[最終改定 2021年 8月 1日 全 17ページ]

(1) 「タンノイ」 とは？

我が家のオーディオ装置は、高級品という程のものではないが、一応、ビンテージ名品の範疇には入るだろう。

スピーカは、英国タンノイ社の「チェビオット」。シリーズ中の中堅、片チャンネル 13万円に相応しいものを、チューナー、アンプ、プレイヤーまで、全部入れ替えたから、総額では 50万円に近かった。当時の月給は高々 7~8万円。下の子供が生まれ、女、男と、確率 2分の 1の籤に当たったことが嬉しくて、清水の舞台から飛び降りた。お誕生日、クリスマス、お正月、ひな祭り・・・、子育てに一所懸命な頃の写真が残っているが、場違いに大きいオーディオが日々の生活感に馴染んでいないのがアリアリ。今思えば、随分と無茶をしたものである。

1996年頃だったか、エッジが経年変化でヨレヨレになっていることに気づき、輸入元である TEAC へ修理に出した。1本 7万円もするのだから、他の新品を買う方が常道だったかも知れないが、惚れた弱味、純正品の高飛車な修理費でも、直るだけまし、と思い直した。そのエッジが、また駄目になっていることに気づいたのは、昨年秋。さて、どうするか。

タンノイの売りは、「コアクシャル(同軸)」の構造にある。仕掛けを知らぬ人が見たら、高音用のツイーターが見当たらない。低音用ウーハーの中心にピタリ、埋め込まれているのだ。何がメリットかと言えば、聴く位置によって 2つのスピーカからの距離がずれないから、位相ズレが起きない。結果、ステレオスピーカの間、どこから音が出ているかの定位が、ピシヤリ、正に 1センチ刻みで聞こえるのだ。録音のマイク設定が下手だと、そうはならないのだけれど、へボなスピーカで聴く分には、その難点はバレない。そればかりを聴く訳ではないが、やはりタンノイは良い。

他が駄目だとは言っていない。JBL の凄さは何度聴いても打ちのめされるし、お金があれば「インフィニティ」や、「リン」とか言うメーカーも良いなあ、と思った。国産のヤマハを聴いて、タンノイにピアノは無理かも、と思ったことさえある。結局、どこが良いの？、と聞かれれば、永年連れ添った馴染み、とでも言うか、一時の派手さはないが、飽きが来ない。伴侶と一緒に、あれこれ目移りするよりは、平和で良からう。

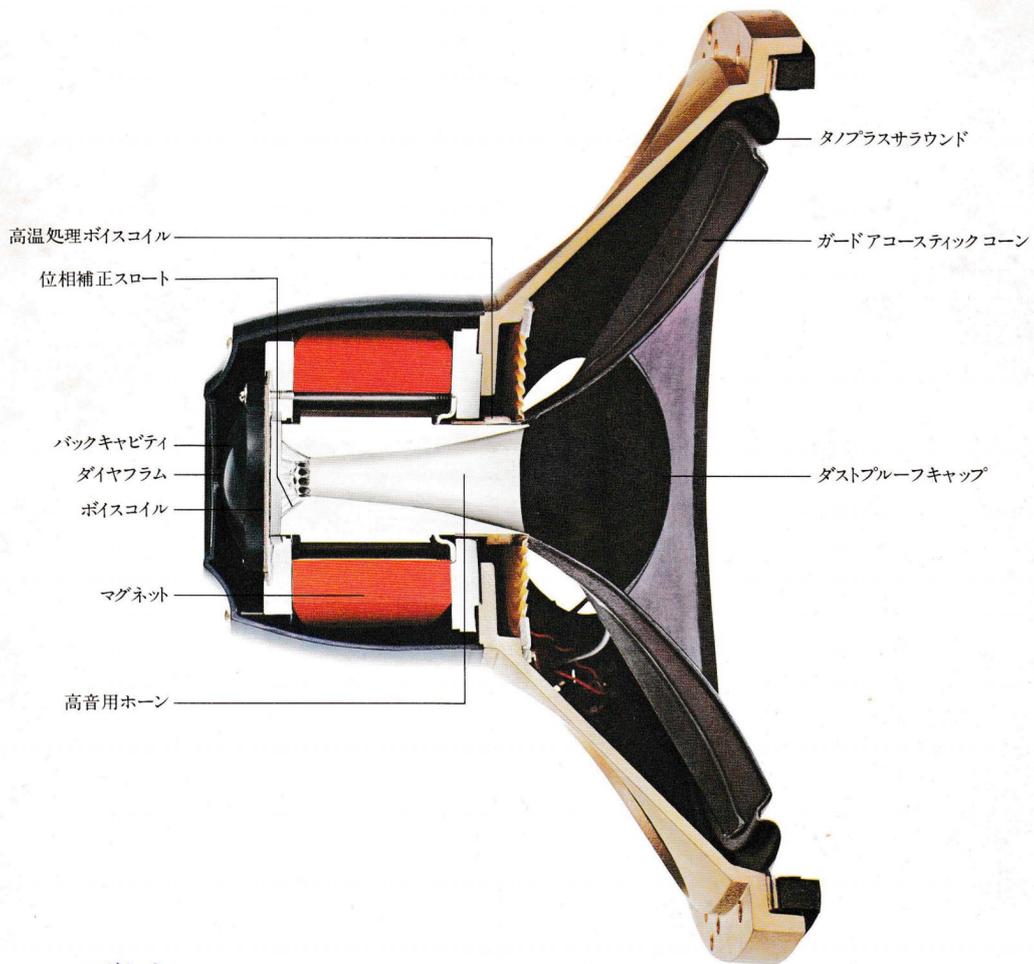
TANNOY HPD Series

音像の分解能、定位感がすぐれた同軸型2ウェイ方式

ハイパフォーマンス・デュアル・コンセントリック (HPD) と呼ばれるタンノイ独自の同軸型2ウェイ方式は、ダイレクト・ラジエーターのウーハーとホーン・ロードのツイーターを、1個の強力なマグネットをはさんで同軸上に組み合わせました。

タンノイが永年にわたって磨き上げてきたこの完全な同軸型は、ウーハーとツイーターの2個のユニットから別々に放射された音が同じ点で合成されるために、音像の分解能、定位感がすぐれ、自然な音場を再現できる大きな利点があります。

タンノイの伝統的な豊潤で自然な音色の最大の秘密、それはタンノイが半世紀にわたってかたくなに固執し、磨きつづけてきたタンノイだけのユニークな構造にあります。



マグネット

HPDユニットには、非常に強力な Aleomax 5 マグネットが採用されており、ダンピングのすぐれた再生音を保証しています。

ティアック(株) カタログ 「TANNOY」 (1976年) より転載

(2) 設計思想に見るお国柄

伝統工芸品ではない工業製品にも、お国柄は現れるもので、諺に曰く、「フランス人が発明し、アメリカ人が製品化したものを日本人が商品にして儲ける。」

工業化の規模が小さい、カメラや音響機器分野での日本製品の席卷ぶりを見て、ヨーロッパ代表としてのフランス人が皮肉を込めて言ったのだと理解するが、クルマまで、日本がアメリカを抜いてしまった。一方で、後から、中国、韓国が追い上げるようになると、魅力の差は、技術力ではなく「アイデンティティ（個性）」。

そうなると、今までの嵐を何とか難破せず

に切り抜けたヨーロッパ勢、とりわけ、ドイツ、フランス、イタリアが強い。

イギリスの自動車産業は、見る影もなく、他国資本に買収されてしまい、可愛らしい「ミニ」ですら、今はドイツ BMW の傘下。音響機器のタンノイは、1974年に創業者が健康を損なって、一度アメリカ資本に売却したが、数年後、新たな経営陣が買い戻しに成功、伝統を復活させた。

当時は、お家騒動の常、表向きには語られないから、どこの資本かは気にせず、「イギリスの伝統」、タンノイを買った。今、振り返れば、デュアルコンセントリックの第二世代、「HPD」シリーズは 1973年の開発なので、設計思想は正しくイギリスだが、生産は正にアメリカ資本が影響した僅かな期間にかかっている。言うなれば「Made in Occupied Japan (占領下の日本製)」と同じ悲哀を戦勝国のイギリスが味わわされた可能性も否定はできず、実際、スピーカエッジのウレタン劣化をアメリカのせいにする音響評論家の意見も目にした覚えがある。

が、この件に関する限り、私は、イギリスの伝統をアメリカの合理主義が看過した、とは見ていない。逆に、同時代の製品に用いられた高分子化合物の劣化に関しては、自身の経験に照らして、日本製品がだらしなく駄目になるのに対し、同類のアメリカ製品が実に元気なことに、底力の差すら感じている。その差はどこから来るのだろうか。工業製品と民生品とでは、思想が異なるのかも知れない。今、日本製の音響機器が、ビジネスとしては成り立たなくなっているのなら、かつての三菱「ダイヤトーン」スピーカのように、工芸品の領域に立ち戻るのが正解なのではないか。

(3) 修理の手法に悩む

「チェビオット」は、床置き、重さ 25 Kg ほど。サラネットを外すと、4本のボルトでエンクロージャに止めてあるスピーカは表から簡単に外せるので、修理の際は重さ 6 Kg 弱のユニットだけを送り返す。

修理の仕方には、いくつか手法がある。一つは、今でも輸入代理店をやっている TEAC に修理に出すこと。値段は 8万円以上するらしい。家内に話すと、私よりオーディオを使っている時間は長いのに、そこまでする価値があるのか、と懐疑的。海外旅行で一緒にいて以来の音楽仲間、Kさんは、セーム革で作られた修理部品を入手して自分で既に何本か手がけられた由。それだと、1万円ちょっとと自分の手間だけでできるとのこと。細かい修理仕事の経験がない訳ではないが、専門家がいる限りは自分で手は出さない、という妙な潔癖主義、表現を変えれば、手仕事に対する多少の自信よりも、ほんの僅かな音質変化でもそれを聞き逃さない耳への絶大な自信がそれを制した、という方が正直かも知れない。

昔はなかった方法で最近の選択肢は、日本各地に何軒か店開きしているスピーカ専門の修理工房。医者で言えば、大病院ではないが、地元では評判の名医、みたいなもの。数年前の新聞記事がスクラップしてあったので、山形県鶴岡市のお店をネット検索した上で、年の暮れに電話を入れてみる。神の手、と表現されていた、担当 S さんの対応は丁寧だった。値段は片方 3万円。一度修理している私に新情報は少ないが、修理は 2本一緒に出してくれないと、左右バランスの聴き比べができないと言う。更に、ネットワークも経年変化で傷んでいる可能性があるから、一緒に外して送るべし、とのこと。

2本を一度に送れ、というのは方針として納得が行くが、ネットワークも一緒に修理すべし、というのが少しひっかかる。問題がない、と決めている訳ではないが、修理の範囲が際限なく広がるのは気持ちが良くない。それよりも、一番のネガティブ情報は、ポリウレタンは寿命が短いので、10年経ったら、また修理して下さい、という話。正直、と言えそうだが、何度でも修理できるような元設計になっているとは思えない。最初、そんなに短寿命とは予測できずに採用したのは仕方ないとして、10年後、過ちだったと判った段階で、なぜ他の材質に変えようとししないのか？

(4) 休演代役の手配

この手の「逡巡」というやつは、年寄りの傾向なのだろう。白内障の手術を片目ずつやろうか、或は入院して1週間で決着をつけようか、はたまた、入れ歯とインプラントのどちらにしようか、そういう悩みに比べたら、たかがオーディオ装置、さっさと決めるべし。

材質はポリウレタンでもセーム革でも良いとして、右左、片方ずつ修理に出そうという考えが現実的でないとなったら、入院期間の2週間、全く音が出ないのも困るから、バックアップ機の入手が先決だ。いい加減なもので間に合わせれば良いのに、車検の間の代車は、やっぱり外車が良い、などというのは、困ったもの。ちょうど世の中が年末年始休暇に入ったこともあり、アクションは起こさないまま、越年。

昨今、街が正月休みで静かなのは、正に元旦のみ。幸か不幸か、CDプレイヤーが、トラック検索している間、僅かなノイズが乗ることに嫌気していたので、オールインワンの音の良いものを買うことにして、歩いて10分の量販店へ見に行く。

大規模量販店は、ボーズの売り場が独立しているにも拘わらず、お目当ての「ウェイブ・レイディオ」だけが、どういう戦略なのか、通販専用とかで、店頭には見本すら置いてない。オールインワンの設計思想はビクターを初め、国産品でも追随するものがあり、ケンウッドの商品には破格のプライスタグが付いている。物としては最近主流のiPhoneやiPodを直接載せるドック搭載のパワースピーカー。正面に、教えられなければ気が付かないスリットがあって、そこへCDを滑り込ませるとCDも演奏できる、という代物。小振りな大きさにしてはそこそこの音が出るし、デザインも中々良い。ケンウッドは、潰れたとばかり思っていたが、かつてのオーディオ専門メーカー。店員に値崩れの理由を聞くと、iPhoneの最新型が、ドックの規格を変えてしまったため、それに対応するべく、旧規格の機種は在庫一掃しているのだと言う。何と気の毒な……。コンパクト、コバンザメ商法の宿命とは言え、罪作りなのは、アップル社。私はその手のICウォークマンは持っていないから、ドックは蓋を閉めて、ないことにすれば良い。という訳で、タンノイ入院中のバックアップ機種選定は簡単に終わって、やっと一步前進。

(5) 一度に済ませるか、一つずつにするか

オールインワンの良さは、電源コードをつなぐだけで鳴ること。看板に偽りはなく、小振りな割には良い音がする。置き場所がないから、タンノイのスピーカの上にチョココンと納まった。偶々、症状の重い左側。暫くの間、そっちをいたわって、右側だけでモノラル再生していたので、入院前に試す積もりではなかったのだが、つい聴き比べをするような話の成り行きになってしまった。

俄然、タンノイの良さが光る。当たり前だ。タンノイ翁にしてみれば、寄る年並、病は得ても、そんな若造とは比較の対象にすら成る訳はなし、その置台にするなんぞ、無礼千万。ケンウッドの方だって、「いえいえ、私はあくまで代役を仰せつかっただけ。御大がこれほどお元気と存じ上げておれば、身の程知らずのこと、お引き受けはしませなんだ。舞台はいっそ 2週間休演にする方が良いと、私も存じますが、代役で続行するかどうかは興行主のご意向、私の口からは何とも・・・。」

タンノイとケンウッドの聴き比べ、とも誤解されそうな状況を作り出したのは、私の非。

「これ、タンノイ。そう拗ねるでない。ケンウッドはあくまで貴公の代役じゃ。2週間も休演したら、お客は他へ逃げるぞ。やはり、若造では駄目か、となれば、お主の名声はまた盛り返すであろうし、一方、次の世代にこうして登竜門を開くのも、老境にさしかかる者の務め。先代に引導を渡したのは誰であったか？ここは、後顧の憂いなく、時を逃さず入院静養してはどうかの？」そう諭されてはタンノイ翁に異存のあろう筈もない。

私が、左右別々に修理に出そうかと考えたのには、訳があった。一昨年 3月 11日の東日本大震災の折、片方を床に倒してしまったのだ。畳の上だったので、外観上はサランネットへの小さな瑕だけで済んだが、ボイスコイルの擦れはそれが一因かも知れない。最悪、片チャンネルは完全には元に戻らない可能性を懸念していたが、代役まで手配したら、左右一度に修理に出す踏ん切りがついた。後は、どこへ入院させるか、その決心だけ。

(6) 灯台下暗しの修理拠点

駅から遠ざかる方向、我が家からの徒歩圏内に、骨董オーディオ屋があることは 2年程前から気付いていた。

通りから直接 2階へ上がる店構え、ガラス扉から中を覗くと、人の気配はなく、マッキントッシュの真空管アンプとかが鎮座しては敷居が高く、気軽に入る雰囲気ではない。それが先日、散歩の帰り道に偶々店を覗いたら、中から声をかけられた。勢いで入ると、いきなりタンノイのユニットが積んであるではないか。当然、修理の話になった。

店主曰く、ポリウレタンのエッジは、日本の高温多湿な気候風土では持たないから、セーム革に交換することを推奨すると言う。一本 3万円。値段は良いとして、純正のポリウレタンを捨てることの懸念を伝える。

店主：「40年前、セーム革で作るのと、ポリウレタンにするのと、どちらが安かったと思いますか？」

私：「そりゃ、ポリウレタンに決まっているよ。」

店主：「でしょ？ ポリウレタンがコストと生産性で選ばれたのは明白で、音質面の優位性で選ばれたのではないんです。であれば、それに固執する理由もないですね。」

私：「ウム …… (中々、説得性がある)。」

店主：「セーム革にしたら、千年持ちますよ。」

JBLも、タンノイも、メーカーが供給する純正部品 (リコーン・キット) の材質は、製造時と同じなのだろうか？ 製造時は経年変化が予測できなかったのであれば、そこは責めないとしても、10年経過したら、また交換して下さい、というポリシーは、頑固を通り越して愚鈍と言うべき。百歩譲って、粘弾性材料の特性が短寿命の欠点を凌ぐというのであれば、何回でもそこだけ取り替えられるような設計になっているべき。もう一点、悩むのは、セーム革であれ、改良ポリウレタンであれ、素材は十分に吟味したにせよ、それをコーン紙に貼付けるのは高分子接着剤の筈。スピーカというものが世に現れて、未だ百年経過していないので、千年の寿命は言葉の綾として、次の百年、持たせようとしたら、例えば膠を使うなど、そこも気を配らなければ、片手落ちではないのか。

(7) セーム革 vs. ポリウレタン

スピーカは、静電気で駆動する一部の特殊なものを除くと、永久磁石で作られる強力な磁場の中にコイルを置き、そこに流れた電流が作り出す磁力による振動を何らかの振動板に伝え、それを空気中に音として伝播させる仕組み。動かないベースと、動く振動板を繋ぐのが、エッジの役割。古来、紙、布、ゴムなど、しなやかなものが使われて来たが、1970年頃から新登場したのが、ポリウレタン系の高分子化合物。タンノイ社では、「タノプラス・サラウンド」なる商品名をつけて、HPD シリーズに採用。シットリした感触の手触りで、いかにも固有振動数を持っていなさそうなのは良いが、難点は、寿命が短いこと。

「ポリウレタン」は、経年変化によって、組成中のエステルが空気中の水分、窒素酸化物 (NOx)、汗などの塩分、紫外線に反応して、加水分解を起こし、酸やアルコールを生じて劣化が進む、という厄介な性質をもっている。そうならない限度は 5年程度、何かの対策を講じても、長くて 10年、というのだ。劣化が進むと、シットリとしていた手触りが、ネットリに変わり、あるいは逆に乾燥が進んでボロボロになり、切れたり穴が開いたりする。当然、音にも変化が現れている筈だが、直接、耳でそのことに気づいたことはなかった。カサコソ、という何かがこすれる音は聞き逃さなかった。それは中心軸がずれて、ボイスコイルが触る音。心臓に悪いこと、この上ない。そういう事故を生じるような良い加減な素材を高級スピーカのような耐久消費財に用いて良いのか?、という疑問が湧く。

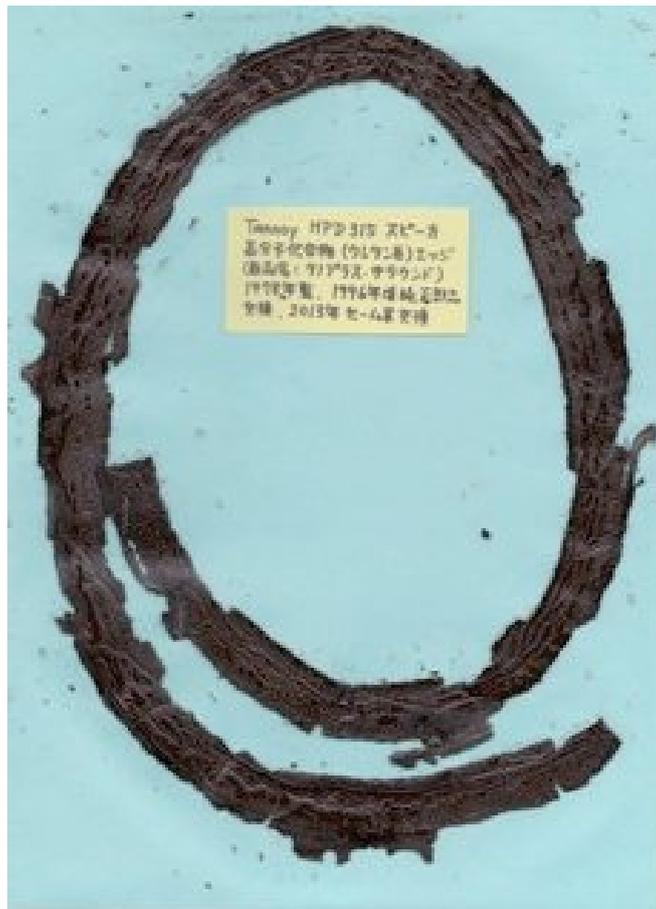
俄勉強したところに拠れば、「セーム革」とは、「バックスキン (鹿革)」を鞣した後、表皮をはぎ取って残った裏側だけの革を指す。牛、馬、羊、他の動物の革でも同じ加工はできるが、濡れても柔軟性が損なわれないのは鹿革だけなのだそうだ。用途は貴金属の表面清掃に最適で、肌の手入れには成分中のコラーゲンが良い。鞣し作業に昔は植物性のタンニンを用いたが、クロームを用いると作業効率が高まるため、今は生産量の 9割がそちら。更に、不織布で似たようなものが作れるようになり、「人造セーム革」なるものも存在する。骨董品として最も古いものは何百年、何千年前のものがあるのかも知りたいところだが、それは未発見。ともあれ、今回は、ポリウレタンではなく、セーム革の方を選択することにした。

(8) 組立て作業

約束通り、最短の 5日で修理が仕上がって来た。

コーン紙をそっと手で押してみる。左右とも無事、無音。テストの内に入らない気休めだが、それでも、ヤレヤレ。

高分子材はどのように劣化するのか、という教材として取り置くよう頼んであった元のエッジ材も、できるだけ原型を留める形で戻された。捨てるのだから、雑に切り取っているのでは、と疑った訳ではない。ホルマリン浸けの摘出臓器みたいなもの。見て気分の良いものでないことは、良く判った。



良くぞ、ご無事でお帰りなされた。退院の夜は我が家で静かに寝かせ、接着剤が落ち着くのを、気持ち、待った翌日。

エンクロージャにユニットを収める。ボルト 4本だから、作業自体はアツと言う間だが、エンクロージャを立てたままでの作業は不安定なので、一度、床に寝かせる。そのための移動の方が余程大変である。



ボルトやエンクロージャに瑕を付けないよう、当て布をかませながら、組み上げる。トルクレンチは持っていないが、締め付けの手順はタイヤのホイール交換と同じ。ふと、それは自分でやるのが当たり前、と決めてかかっていた私の考えが古いのかも知れない、と邪念が入る。パンクしたら即刻、ケータイで JAF を呼ぶ。そうか …。

スピーカコードを繋ぎ込み、腰を痛めないよう、そちらにも注意しながら、元の場所へ戻す。それを 2度繰り返せば、作業完了。

さて、テストには何を鳴らそうか？ やはり、チェンバロ協奏曲かな。ウ〜ン …、実に良い。最初の 1分で、もう満足してしまっている。最低、1時間は馴らし運転が必要だということに …。

(9) 宝の持ち腐れ、テレビの音

一週間後、思い立って、テレビの音声出力もオーディオに繋ぎ込む。昔試して、大した効果はないから止めたが、考えたら液晶画面のテレビに買い替えて以後、テストしていない。AUX 入力端子は CD に使っているので、2系統のうち片方しか使っていないテープ入力端子を転用する。

結果、今まで貧弱な音で我慢していたのは正に宝の持ち腐れ。それが悔やまれるほど、中身の濃い音になった。コントラバスの音が最も大きく改善。液晶画面の裏は丸っきりデッドスペースなのだから、小型スピーカしか搭載しないことをスペースのせいにするのは、眼で見ている間は貧弱な音でもバレないだろうからコストをかけるだけ無駄、というメーカーの後ろ向きの姿勢がアリアリ。

音楽番組を視聴するときは、タンノイ翁にお出ましいただくとして、それほどでもない番組の場合は、新進気鋭のケンウッド君にも出番を与えるべく、テレビとの間は、最新の光デジタルケーブルで繋ぎ込んだ。テレビの側の PCM 出力設定方法が、マニュアルに記載されておらず、読み解くのに 3日かかったが、全工事が無事終了。右から 2列目のラック、レコードプレイヤーの下にもう一つプレイヤーが隠れているのが SP 専用。そのため、チューナーが押し出されたままなのは、長期課題に預ける。



(10) 過酷なテスト課題、シューベルトの「鱒」

それから一ヶ月。出版社の好意で、「蓄音機の時代」の本の著者、K氏を東京都下の自宅にお訪ねする幸運に恵まれる。

愛機は戦前の名機、HMV 202号。鳴らして下さった SP の 1枚は、シューベルトのピアノ五重奏曲「鱒」、イ長調。弦楽四重奏は普通、ヴァイオリンが 2本、ヴィオラ、チェロ、という編成だが、この曲は、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、という一風変わった組み合わせ。低音部を受け持つコンバスの音が SP に入っていること、それを電気の助けも借りずにふくよかに鳴らす性能には感嘆してしまった。

帰宅して、自分も同じ実験をしてみようと思いつく。音源はハイビジョン放送のテレビ録画。1981年制定の CD は 16ビット、44.1K、96年にお目見えした DVD は、24ビット、96K のサンプリング、と一応知識はあったが、それをオーディオ装置で鳴らす、という頭がなかった。(昔、テレビを繋いで大した効果がなかったのは、地上波がアナログの時代だったことを忘れていたのだ。) ピアノの歴史を紹介する音楽番組、4楽章だけのサワリだが、ともかくも鳴らしてみる。凄い低音！ スピーカの乗っている畳から振動が伝わるのには、ビックリ。これを眠らせていたとは！

今度は LP をかけて、学生時代に買った縮刷版スコアで、コンバスの音を追いかける。冒頭、10小節に亘る根音 A が周波数 55Hz。続く 11小節はその下の F、44Hz。曲中の最低音は、ピチカートで弾く E、41Hz。LP は DVD には敵わないが、オーディオ装置のテストとしては、中々過酷な課題曲であることを十分認識した。

ついでに、ピアノの最高音、C5 は 4,186 Hz。これは基本周波数の話なので、楽器固有の音色を伝えるのは可聴周波帯全域がその役割を担う。人間がサイン波を音として知覚するのは年齢にもよるが、概ね 20,000Hz の辺りまで。それを 5,000Hz でカットすると、明らかに音色に変化を来し、10,000Hz でも変化は判るという。それも実体験テストの価値はあるが、別の機会に適切なテストピースを探しておくことにする。大型エンクロージャの真価は低音側にあるのだし、自分の耳を測定器モードで使うのは、幸せな態度ではなからうから …。

(11) 出張修理のボランティア

藤沢に住む妹の亭主は、大学のオーケストラでヴァイオリンを弾き、卒業後は永く弦楽器の輸入商社に勤めていた。定年退職の後は暇にしている気配だが、楽器を触るのは必ずしも楽しくないらしい。それは、私が帰宅してまでパソコンのキーボードを叩きたくなかったのと同じ心理と見た。私がイタリアから持ち帰った骨董ヴァイオリンの鑑定のために、横浜の自宅に来て貰ったときのこと。用事が済んで余談になったら、「最近、スピーカの調子が良くない。」と、聞き捨てならないことを言う。

彼のタンノイ III LZ は、ブックシェルフ型の名機。その音に惚れた父が床置きの「バークレー」を買い、私は少し小型の「チェビオット」にしたという、言わば師匠に当たる間柄。私にできる保守には協力する義理がある。検索カードで管理していた 1,000枚を越える LP は、全て CD に買い直し、専用ラックを部屋に作り付けて納めたが、オーディオマニアではないから、スピーカは一度ネットワークを交換した後、しばらく触っていないという。聞き取りの症状から疑われるのは、ウーハー側の通電不良しかない。

夕方の散歩の折、エンクロージャ屋の Mさんの工房に立ち寄って対処法を相談すると、手許のメモ用紙に図面を描きながら、「裏蓋を開けて、このコネクタージャックを抜いて磨いたら 100%、直ります。あなたなら自分でできるでしょ。丁寧に磨くと再発するから、雑に磨くのがコツ。」と、秘訣を伝授してくれる。私も同じ場所を疑ってはいたが、100%、と言われて元気が出た。義弟にボランティアの出張修理を提案すると、「是非、お願いします。」とのこと、久々の現場作業となった。

病院とドクターヘリでは道具の厳選度合いが異なるのと同じく、鞆に入るだけの工具持参で出かけたなら、患者の III LZ にはインフォームド・コンセントの手続き済みらしく、ブルーシートを敷いて準備が整っていた。不調の再現を確認後、早速作業にかかる。5分で目標のコネクタージャックを抜き、サンドペーパーで言われた通り、ザクツと磨いて差したら、一発で復旧、ひとまず面目は保たれた。予防保守の鉄則、現象が出ていない反対側にも同じ処置を施して、作業は無事終了。結局、酸化皮膜の接触抵抗値が湿度で変化するのが原因だった、ということになる。

(12) 箱が鳴ることの深意



タンノイ III LZ のユニット

先の出張修理がキッカケで理解の深まったことがある。

指南役、エンクロージャ屋の M さん曰く、「タンノイは箱が鳴っている。」、と言うのである。「箱鳴り」とは、強度が不十分なために板が共振することを言うから、褒め言葉ではない。雑誌の評価は、タンノイの場合、箱の共振を見込んだ楽器としての設計になっているから、そこが美点なのだと言う。正に、「あばたもエクボ」のような毀誉褒貶、不可解なので、これまで請け売りはしないで来た。箱を開けて判ったのは、使っている木が、ホワイトパイン系の良質な無垢材であること。ベニヤだと数十年で張り合わせが剥がれて駄目になるが、これならその心配はない。更に、共振を利用する、というような薄さではないことも確かめられた。自分のを開腹したときは問題意識が欠けていたが、今頃ピンと来た。M さんは、「スピーカ単体よりも、バックロードホーンなど、音道の共鳴の仕掛けに余程お金がかかっている。」ということと言いたかったのだ。「箱鳴り」と、M さんの言う「箱が鳴る」のは別物。トリッキーだが、初めて真意を理解した。

義弟のも私のも亡父のも全て、タンノイの十八番、バックロードホーンではなく、単純なバスレフ・タイプ。今までそれで楽しんで来たので、上位のバックロードホーンに取り替えるところまで深入りする積もりはないけれど、ショールームで鳴っているスピーカは 10 万円程度のもので結構良い音がする。ということは、今使っているものが潰れたときはそれを買えば良いので、それ以上の心配は無用、という訳だ。その為には、今時希有なお店の存続が必須ながら …。

あとがきに替えて「レコード 老前整理不要論」

2013年に拙文の(1)～(10)を書いたから、丸2年が経過。オーディオ全体は、あちこち老化との闘いが続くが、タンノイのスピーカは大手術が功を奏し、益々元気になっている。その間に書き溜めた雑文の原稿を整理して再認識したのは、私の興味の主軸は、やはり「音楽と技術の接点」にあること。元々、何かのコレクターという訳ではないのだが、エレクトロニクスで世の中から消え去った機械的なものを動態保存する、ということに興味にする間に、あれこれ溜まってしまい、自分の部屋は、博物館の裏方の様相を呈している。その一端がオーディオ。

音楽愛好家の全てが技術に詳しい訳ではない。寧ろそれらは相反する傾向にあるようで、友人知人の中に、聴かなくなった昔のLPレコードを抱えたまま、という人を何人も見聞きする。処分の決断は中々できるものではないけれど、遺品になってしまったら、燃やすゴミに出せるので、面倒でもないのは、資源ゴミに出せる古書と同じ。悩む必要はないが、面と向かってそう言える相手は限られる。それに比べたら余程平和な解決策がある。10年前にはなかった選択肢、それらをもう一度聴くのである。

愛着のある一定枚数(例えば100枚)だけを手許に残す。プレイヤーは、5万円でもまともな新品が再度手に入るようになった。それ以外のオーディオは先に投資金額を決める。手持ちの現用でも構わないが、ひとまず5万円でも構わない。(ちょっと技術的なことになるが、両者を繋ぐのにイコライザーという1万円程度の回路が必要な場合もある。)スピーカは先のオーディオに附属して来るが、片方10万円のものを買うと、LPにこんな音が隠れていたのか、と思うくらい、良い音が出る。テレビの音も然り。その後、スピーカや真空管アンプにいくらお金を使うかは個人のご自由。(使いたければ100万円くらいは、直ぐに消える。)そういう需要に商売上手は既に気付いており、2万円するかしないかの商品が新聞の通販広告に載っているが、それは玩具。そんなものでデジタル音源に変換しても文化的意義はないし、既に業界でアーカイブ作業は進んでいるから、個人所蔵のレコードはかけ潰して構わない。いかがだろう。

尚、今回の改訂は、(11)、(12)を加え、全体に少し体裁を整えただけで、2年前の記述は改変せず、趣旨は当時のまま残してある。

著者略歴

西 志郎 (にし しろう) 本名: 西村 志郎 (にしむら しろう)

1948年鹿児島生まれ、神奈川育ち。埼玉大学理工学部卒。立石電機(現 OMRON)にて自動改札機や電話交換機の SE 業務の後、AMEX 日本支社情報システム部代表、機械化温室プロジェクト、大学非常勤講師などを経て 2006年未定年退職。現在、東京理科大学近代科学資料館ボランティア協力員。

本作品は DTP 出版「帰って来た タンノイ」の再掲です。

| | | | |
|-------|----|-----|-------------|
| 2013年 | 3月 | 25日 | 原稿完 |
| 2013年 | 3月 | 27日 | 初版 発行 (10部) |
| 2015年 | 5月 | 5日 | 第二版 改訂発行 |
| 2018年 | 4月 | 24日 | PDF 電子版 |
| 2021年 | 8月 | 1日 | HP 初掲載 |

Copyright © 2013 by S. Nishi

Printed in Japan